

# 敗戦直後における家族情緒と共同性の再編

——「家」の生活保障の観点から——

早稲田大学人間科学学術院 本多真隆

### 1 目的

本報告の目的は、1945～1960年前後の政策的な家族論における、家族情緒と生活保障にまつわる言説を検討し、高度成長期以降に普及する「戦後家族モデル」(山田 2005)との関係を考察することである。

敗戦直後の家族論は1950年代の家族制度復活論争にいたるまで保守革新の対立があり、特に家族の情緒的關係は、中心的な論点のひとつであった。玉城肇はその様相について1952年に次のように述べている。

「家族制度」の問題を、微妙にする要素として「愛情」の問題というのがある。これも分析すれば、封建的な愛情のありさまとか、民主的な愛情のあり方とか、いろいろな理屈はつけられるだろうけれども、理屈では処理できぬ一種の感情の問題として登場する。……また両方ともに、往々にしてこの「愛情」の問題に逃げ込んで、自分の立場を有利にしようとさえする。(玉城 1952: 37-8)

いわば敗戦直後は、法的な「家」制度の崩壊に際して、保守革新の双方が家族の「愛情」のモデルを掲げ、その正統性を議論している状況だった。本報告はこうした情緒にまつわる言説のうち、生活保障と家族情緒の結びつきと、その再編について検討する。戦前期の福祉政策は「家」や共同体の「情誼」に委ねられており、敗戦直後はこうした生活組織の再編期にあたる。この時期の家族論の検討は、「家」から核家族的な家族福祉への依存に移行した「戦後家族モデル」、また「日本型生活保障システム」の形成をみるうえでも有用になると思われる。

### 2 方法

資料の収集に当たっては、家族法に関連する会議録および回想が収録された、我妻栄『戦後における民法改正の経過』(1956)、堀内節「続家事審判制度の研究」(1976)、また太田武男・加藤秀俊・井上忠司『家族問題文献集成』を活用する。分析においては、家族の情緒的關係と生活保障の関連に関する記述を抽出し、各々の論者が自らの立場に合わせて情緒をどのようなロジックのもとに位置づけているかに注意し、その種差性をまとめる。

### 3 結果

検討から浮かび上がるのは、保守革新の双方が、小家族的な家族福祉を前提に議論している様相である。保守系論者は戦前期の家族道徳を継続させる傾向にあったが、革新系論者も内面的な「愛情」による家族福祉のロジックを準備していた。

### 4 結論

本報告が検討する敗戦直後の家族論の論点のひとつは、「家」や共同体に委ねられていた生活保障をどのように再編するかということであった。報告では、保守革新や既存の生活組織の改良など、さまざまな立場があらわれながらも、家族に福祉をゆだねる前提は共有されており、それが家族情緒によって補強されていたという視点を提出したい。

### 文献

玉城肇, 1952, 「家族制度はどう変わっているか——親と子の問題」『ニューエイジ』4(4): 32-9.  
山田昌弘, 2005, 『迷走する家族——戦後家族モデルの形成と解体』有斐閣.